

高島進

1959年兵庫県生まれ。

1982年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業、1984年武蔵野美術大学短期大学部油絵学科卒業。その後、メキシコのアジェンダ・アート・スクールで1年間学ぶ。

高島進のドローイングは、線の純粹さを表現したいという思いが根底にあります。そのため、彼はすべての作品に「筆、インク、紙によるドローイング」「鉛筆削り、色鉛筆、キャンバスによるドローイング」「金属ペン先、紙によるドローイング」などの副題をつけます。". 副題にあるように、彼の作品は、筆、鉛筆、銀や金、真鍮の先のペンなどを使って、絵を描くことを目的としています。彼は、作曲は「ピアノやバイオリンのための音楽作品」と題することができるので、ドローイングも「筆と紙」を使った絵画と呼ぶことができると主張しています。

高嶋は、作品を線で描いていくリニアドローイングをしています。筆をインクに浸し、一筆書きで描いていく。その結果、インクは最初は濃く、最後に向かって徐々に明るくなっていきます。このプロセスを繰り返し、絵の中にストロークの密度が充満するようにします。鉛筆画では、線は描き始めが最もシャープで、鉛筆の先がすり減るにつれて徐々に太くなっていきます。

手描きの線の質を微妙に変化させた結果、直線的な構成が山の稜線のような面白い波模様を完成させる。高嶋はルネッサンス期に広く使われた画法である金属製のチップペンを使い続けている。メタルチップペンは、一般的な自動巻きの鉛筆で構成されているが、「芯」の代わりに銀や金、銅の棒を使って紙に描きます。高嶋は、スタート地点と線の方法が決まると、作者の意図を極力排除し、投げたサイコロの目で色を決めることもある。

作家は、ペンと鉛筆で描かれた線の純粹さを明確にするために、描くという行為から自分の考えや感情をできるだけ排除したいと考えています。

東京の武蔵野大学で建築と絵画の学位を取得。彼の作品は、東京・青海の青海市美術館や東京・羽田空港に所蔵されているほか、アメリカ、カナダ、日本、イギリスの多くの個人コレクションにも所蔵されています。

これらの手法は、アメリカの現代音楽の作曲家であるスティーブ・ライヒやジョン・ケージに影響を受けたものだと高嶋は言う。

備考 1:

ジョン・ケージ (1912-1992年8月12日) は、アメリカの前衛的なクラシック音楽の作曲家で、ショーンバーグの弟子でもあります。1952年に作曲した「4'33」は、一音もない3楽章で構成されていることで知られています。彼は、アレトリー音楽、拡張技法、電子音楽の先駆者です。賛否両論ある人物ですが、一般的には同時代の最も重要な作曲家の一人として評価されています。(wikipediaより)

スティーブン・マイケル・ライヒ（1936年生まれ）は、ユダヤ系アメリカ人のミニマリストのクラシック音楽作曲家です。ニューヨークに生まれたライヒは、ミウやベリオの教育を受け、アフリカやアジアの音楽、ミニマリストの作曲家テリー・ライリーの影響を受けた。彼は電子音楽を使って幅広い実験を行っています。彼の作品は、最初から最後まで手を叩いて演奏する「拍手音楽」など、コンセプトが斬新です。1966年には自身のアンサンブル「スティービー・ライヒ・アンド・ザ・ミュージシャンズ」を結成し、2009年には「ダブル・セクステット」でピューリッツァー賞を受賞しています。

亞洲文化協會南三三小集 執行長 Catherine Yen